

聖書：ルカ 24：50～53

説教題：いつも神をほめたたえ

日時：2013年4月28日

ルカの福音書の最終回です。ご存知の通り、ルカは続編として「使徒の働き」を書きます。そして使徒の働きの最初の部分は、今日これから見るルカ最後の部分と重なり合っています。この二つを見比べると、ルカの方がはるかに短くて簡潔です。彼はどうせ続きは使徒の働きに書くからと考えて、ここは手短にはしょって書いたのでしょうか。しかし、この福音書を書くことに心血を注いで来た彼が、この最後の部分を安易な気持ちで書いたとは思えません。続編があるとは言え、やはり彼はここに特別な思いを込めて書いた、ここに大切なメッセージを語っている、と見るのが自然でしょう。

この50節から53節を読んでまず印象付けられるのは、弟子たちの「非常な喜び」です。この言葉で思い起こすことは何でしょうか。2章10節：「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」そこで天使が述べた「素晴らしい喜び」と、今日の箇所「非常な喜び」は、原語のギリシャ語では同じです。直訳すればどちらも「大きな喜び」です。天使たちはあの夜、「大きな喜びを知らせに来ました。」と言いました。そしてこの福音書を閉じる時、その「大きな喜び」が「弟子たちの心に」あった！とルカは言っているのです。

もう一つ、この箇所を特徴づけているのは、「祝福する」という言葉がたくさん出て来ることです。50節：「それから、イエスは、彼らをベタニヤまで連れて行き、手を上げて祝福された。」また51節：「祝福しながら、云々」そして実はもう一回は53節にあります(欄外注)。つまり、この短い4節の中に、「祝福した」「祝福した」「祝福した」と、3回もこのことばが使われているのです。しかし私たちは不思議な感じがするかもしれません。神様あるいはイエス様が、私たちに祝福するなら分かるが、人間が神を祝福する、というのはどういうことだろうか。この「祝福する」というギリシャ語のもともとの意味は「美しく話す」とか「良いことを語る」という意味です。そう考えると分かりやすい。神が私たちに良いことを語って下さる時、それは「祝福する」となる。一方、私たちが神様に良いことを語る時、それは「賛美する」、あるいは神を「誉め讃える」となる。そういう意味で、新改訳聖書が53節を「ほめたたえていた」と訳したのは適切です。しかしこの言葉が、50節51節の「祝福する」と同じ言葉であることに注目する時、私たちはここに一つのメッセージを読み取ることができると思います。それは神の祝福に答えて、私たちの側から神を祝福する言葉、賛美が出て来るということです。これまで書き綴られてきたキリストにある神の福音を知って、弟子たちから最後に神への祝福の言葉、賛美があふれ続けた！これほど素敵な福音書の閉じ方はあるのでしょうか。

さて、ここには本当に喜ばしいことだけがあったのでしょうか。なぜならここにはイエス様が彼らから離れて行かれたということが書いてあるからです。これは決定的な別離を意味しています。51 節の欄外注を見るなら、これはイエス様が天に昇って行かれたこととセットで語られていることが分かります。しかし弟子たちはそれで悲しみに沈んだり、落胆しませんでした。むしろ非常な喜びを抱いてエルサレムに帰ったのです。それは彼らがイエス様の昇天の出来事に素晴らしいメッセージを見て取ったからでしょう。このイエス様の昇天が意味することについて4つのことを申し上げたいと思います。

まずその一つ目は、このキリストにあって、信者もやがて天国に入ることができるということです。イエス様は他の箇所、「わたしは、あなたがたのために場所を備えに行くのです。」と言われました。イエス様が天に昇って行ったのは、ご自身のためと言うよりは、私たちのためなのです。イエス様は私たちの代表として、天への道をつけてくださったのです。私たちの一人となってくださった方が天に入られたことによって、ちりから造られた私たち人間が、神の全き祝福に満ち溢れた永遠の世界に入ることが保証されたのです！パウロはさらに進んで、神はキリスト・イエスにおいて私たちをともによみがえらせ、「ともに天の所に座らせてくださいました」とまで言いました（エペソ2章6節）。キリストが天に入られたので、私たちもすでに天の所にすわっているのと同然の祝福に入れられているということです。

キリストの昇天に示されている二つ目のメッセージは、イエス様の離れて行ったあり方に示されています。イエス様は手を上げながら離れて行かれました。これは大祭司が民を祝福する時の姿です。大祭司はいけにえをささげ、手を上げて民への祝福を取り次ぎました。イエス様はそのことを、ご自身の十字架の尊い犠牲に基づいてしてくださいました。これは弟子たちの脳裏に深く刻まれた主のお姿だったのではないのでしょうか。イエス様は天に昇る時、天ばかりを見つめ、地上の弟子たちのことなど見向きもされなかったのではないのです。イエス様は弟子たちに向かって手を上げ、祝福しながら離れて行かれました。すなわちイエス様の関心は私たちを祝福することにこそあるのです。そして今も天で私たちのためにとりなして下さいます。ヘブル書7章24節25節：「しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わる事のない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。」 またこの方は私たちの地上の歩みのためにもとりなして下さいます。毎週、礼拝の最後に行なわれる祝祷は、そのことを現わしています。キリストのとりなしを頂いて、私たちは地上の歩みをして行くのです。

キリストの昇天が意味する三つ目のことは、前の49節にあったように、キリストは聖霊を受け取り、聖霊を遣わすために天に昇られたということです。私たちは目に見えない聖霊より、目に見えるイエス様が地上にいらっしゃった方が良いと思うかもしれませんが、イエス様は聖霊が遣わされる方がはるかにあなたがたにとって益である、とヨハネの福音書16章7節で言っておられました。イエス様が地上に居続けたら、イエス様はご自分の近くにいる人々しか助

けることができませんが、聖霊はすべての人に臨んで助けることができます。そして聖霊はイエスが遣わす霊であって、その聖霊においてイエス様ご自身が私たちと共にいてくださるのです（ヨハネ 14：18、マタイ 28：20）。

そしてキリストの昇天が意味する四つ目のことは、イエス様は父なる神の右の座に上げられて、全世界・全宇宙を治める最高の座に着かれたということです。この世界はもはやサタンが支配するところ、あるいは得体の知れない不気味な力や運命が支配するところではありません。今やこの世界はキリストの御国となったのです。確かに最後の審判の日が来て、最終的なさばきがなされるまでは、なおサタンの活動が許されていますし、理不尽なことも起きます。しかし私たちの目からは悪とか絶望としか見えない中からも、この方は私たちの最善と益を取り出すことができる方です。その方が私たちの救いのために一切を支配し、必ず最後の天の御国に至るまで導いてくださると知ることに勝る慰めは、他にあるでしょうか。

弟子たちはこの天に上げられたイエス様を見て、イエス様を礼拝しました（52 節欄外注）。彼らはイエス様の十字架と復活と昇天を見た時、この方がただの人ではないこと、神ご自身であられることをはっきりと分かったのです。それは何と素晴らしいことでしょうか！日本では神と言っても、八百万の神々を思い浮かべるでしょうから、たくさんいる神々の一人が人となって現れたと考えても、そんなに驚くことではないかもしれません。しかしユダヤ人が信じているのは世界にただお一人の神です。その神が人として現れ、私たちと一緒に生活し、同じ地上を歩いてくださった。そして私たちの罪を一身に背負い、涙し、叫び、戦いながら、ついには十字架上の贖いの死を成し遂げてくださった。そしてサタンの力を打ち滅ぼし、死より復活し、私たちの救いを完成させるために天へと昇って行かれた。この神のお姿を本当に知るなら、誰がひざまずいて礼拝せずにいられるでしょうか。誰が自分のすべてを投げ出し、ひれ伏してこの方を拝まずにいられるでしょうか。そしてそのようにこの方に心から礼拝をささげた時、彼らは非常な喜びを抱くことができたのです。

最後 53 節に、エルサレムに帰った彼らは、「いつも宮にいて神をほめたたえていた」とあります。なぜ彼らは「いつも」ほめたたえることができたのでしょうか。「いつも」素晴らしい現実ばかりがあったからでしょうか。そうではないでしょう。地上にあるがゆえの様々な困難や戦いも日々あったでしょう。しかし、先に見たように、彼らは自分たちが今や救われていることを知っていました。目の前にどんな悲しみや試練があろうとも、それらを超えて自分たちはキリストにあって救われており、必ず天における永遠の命の生活へ入って行けることを確信していた。また自分が変えられているだけでなく、この世界も変えられている。この世界は悪魔の手の下にあるのではなく、偶然や人の力に任されてどうなるか分からない場所ではない。この世界は、私たちのために死んでよみがえり、父なる神の右の座で今もとりなし続けて下さっている救い主のもとにあります。このことを信じ、見上げる時、私たちは将来の天における生活ばかりでなく、地上における今の生活をも肯定することができるのです。確かに神の正義が完全に実現する神の国はなお将来にあり、それまでは様々な解せないこと、悲しく思われる

こと、つらいことが多々あるとは言え、この世界は昇天した私たちの救い主の御手に握られている世界です。私には分からなくても、この救い主が良い目的と理由を持って一切を導いている世界です。私たちはその方に信頼し、大船に乗った気持ちになって、上からの平安を頂き、今のこの人生を悲しいことがあっても受け入れることができるし、また希望を持って生きて良いのです。主はすべてを益に用いて、私たちを必ずかの日に栄光の救いへと導いてくださるからです。

ルカはこの福音書の1章1節で、「すでに成就された出来事」について書く旨を述べていました。そして神はその救いの約束をこのイエス・キリストにおいて成就してくださいました。このキリストを神がくださった救い主として感謝し、受け入れるなら、私たちには弟子たちと同じように「いつも神をほめたたえる歩み」、「いつも神に良い言葉を語る生活」が開かれるのです。このキリストをしっかりと受け取って、「ああうれし、わが身も主のものとなりけり。うたわでやあるべき、すくわれし身のさち、たたえでやあるべき、みすくいのかしこき。」(讚美歌 529) と歌いつつ、いつも神をほめたたえる生活、そしてそこに与えられる大きな喜びに生かされる歩みへ進みたいと思います。